

『ウォルシンガム』における 異性装と女性の権利の主張¹

廣 田 美 玲

I はじめに

イギリスにおいて18世紀末から、メアリ・ウルストンクラフトなどのフェミニストが台頭し始め、女性の権利を主張するが、財産継承権など男性優位の法律が施行する中、一般には女性が自らの意志や意見を明瞭にすることは困難であったと考えるのが妥当であろう。

ウルストンクラフトと親交があったメアリ・ロビンソン(1758-1800)自身が執筆したとされる『メアリ・ロビンソンの回想録』(以下『回想録』)には以下の記述がある。

A new face, a young person dressed with peculiar but simple elegance, was sure to attract attention at places of public entertainment. The first time I went to Ranelagh my habit was so singularly plain and quaker-like, that all eyes were fixed upon me.

(『メアリ・ロビンソンの回想録』52)²

この引用は、当時の上流階級の社交場のひとつであったラネラを夫と共に訪れた時の彼女のファッションに関する記述で、「独特」(“peculiar”)ではあるが、「シンプルで優雅」(“simple elegance”)な着

1 本稿は2018年6月30日に開催された第12回日本オースティン協会大会における研究発表に加筆・修正したものである。

2 Robinson, Mary. *Perdita: The Memoirs of Mary Robinson*. Ed. M.J. Levy. London: Peter Owen Publishers, 1994.

こなしのロビンソンに人々の視線が集まったと他者と差異化されたファッションを通じて自己主張している一面が表されている。本稿では、ロビンソンが、実生活において、また彼女の文学作品において、いかにファッションという消費文化を自己表現や自己主張する装置として戦略的に用いたかということを読み解くことを試みたい。



Romney, George. *Mary Robinson*. 1781.
© Trustees of the British Museum.

II 女優、皇太子の愛人、文筆家・・・—メアリ・ロビンソンとは？

独自のファッション流儀を持ったメアリ・ロビンソンとはどのような人物だったのだろうか。彼女の生涯について簡単に見てみたい。

ロビンソンは、1757年、プリストルに生まれ、モア姉妹が経営する寄宿学校で最初の教育を受ける。父ニコラス・ダービーがラブラドル地方沿岸の漁業基地建設に失敗すると、ロンドン転居を余儀なくされる。ロンドンでは、チェルシーの寄宿学校に入り、メリバー・ロリントンに学ぶ。73年にデイヴィッド・ギャリックに指導を受け、女優

デビューの準備を開始するが、同年トマス・ロビンソンと結婚。翌年、社交界デビューをし、10月には長女を出産するものの、75年に夫が負債のためフリート債務者監獄に収監されると、彼女も娘と共に入獄する。監中で最初の詩集を執筆、出版し、その後パトロンのひとりになるデヴォンシャー侯爵夫人ジョージアナと出会う。76年、夫が出獄、その12月についに女優デビューを果たす。79年、シェイクスピアの『冬物語』をギャリックが書き直した『フロリゼルとパーディタ』でパーディタ役を演じ、英国皇太子（後のジョージ4世）から恋文が届き始め、皇太子との情事が始まる。それ以後、ロビンソンは、風刺画などでパーディタ、皇太子はフロリゼルと呼ばれることが多くなり、2人の関係が公のものになる。80年には正式に皇太子の愛人となるが、その12月には離別。その後も様々な男性と情事を重ねる。



Pownall, B. *Florizel and Perdita*. 1783.

© Trustees of the British Museum.³

また、81年にはマリー・アントワネットにも謁見する。92年から本格的な執筆活動を開始し、96年には、ウィリアム・ゴドウィンやメアリ・ウルストンクラフトとも出会い親交を深める。97年には今回取り上げる『ウォルシンガム』を出版、99年3月には『イギリスの女性たちへの手紙 — 精神的不服従に対する不当な措置について』を発表した。この作品にはロビンソンのフェミニストとしてのメッセージが込められている。そして、その翌年1800年12月に波乱万丈の生涯を閉じた。

III 時代のファッションリーダー

ロビンソンは女優としてデビューすると、英国随一の美人と言う評判が広まるほどの人気女優になった。それを裏付けるかのように、1781年から1782年にかけてジョージ・ロムニー、トマス・ゲインズバラ、ジョシュア・レノルズ、ジョン・ホップナーといった当時著名な肖像画家が次々と彼女の肖像画を描いている。

また、『回想録』や、ポーラ・バーンのロビンソンの伝記『パーディタ — メアリ・ロビンソンの生涯』（以下『パーディタ』）を読み進めると、ファッションに関する記述の多さに気付く。次の記述は冒頭の『回想録』からの引用の続きである。

I wore a gown of light brown lustring with close round cuff (it was then the fashion to wear long ruffles); my hair was without powder, and my head adorned with a plain round cap and a white chip hat, without any ornaments whatever. (『回想録』 52)

3 皇太子（フロリゼル）とメアリ（パーディタ）の関係を茶化した風刺画の一例。左には Oh! My Son My Son と嘆く国王ジョージ3世の姿が、右には、妻を寝取られ（cuckoldry）頭から角が出てきたロビンソン氏、その他メアリと関係を持ったとされている男性たちが描かれている。

この引用は、彼女が他者と差別化したファッションで目立っていたということをさらに強調している。例えば、当時の流行であった長いフリルのついた袖口のドレスではなく、ロビンソンはぴったりの袖口のドレスを纏い、また習慣であった髪粉もつけず、質素な丸いキャップとチップ・ハットを被っただけで、装飾品は一切身につけなかった。着飾った社交界の人々の中にあり、このような控えめな出で立ちの彼女は逆に目立ち、冒頭の引用にあるように、人々の目は彼女に釘付けになった。これらの引用からは、彼女は他者が作り上げた当時の流行を追従するのではなく、自分の個性やセンスを貫いた女性であったことがわかる。

著名人が続々と集まる当時最もファッショナブルな場所とロビンソンが表現しているパンテオン・コンサートに連れて行かれた際には、次のようなファッションの描写がある。

At this place [the Pantheon Concert] it was customary to appear much dressed; large loops and high feathers were universally worn. My habit was composed of pale silk satin, trimmed with broad sable: my dear mother presented me a suit of rich and valuable point lace, which she had received from my father, as a birth-day gift …. (『回想録』 52)

この記述からも先程の引用同様、他者との差異化による自己宣伝や、場所によって巧みに着こなしを変えて、自分の魅力を最大限にアピールする技に長けていることが窺える。また、どの機会にどのような装いをしていたかというあたかもファッション・プレート⁴のような詳細な記述からも彼女のファッションへの強いこだわりが感じられる。

さらに、バーンによると、ロビンソンは、盛装もすれば、男装もし、シンプルな装いもできることでも有名であった。そして、ファッション界における最大の名誉とは、例えば「ロビンソン・ヴェスト」や「ロ

ビンソン・ハット」というように新しいデザインのドレスや帽子に自分の名前が付けられることであった。⁵ 1781年から1784年にかけての『レイディーズ・マガジン』の「流行のドレス」(“Fashionable Dresses”)のコラムには、ロビンソンのパトロンで、同じく当時のファッションリーダーのひとりとして見做されていたデヴォンシャー侯爵夫人と共にロビンソンの名前を見ることが出来る。つまり、デヴォンシャー侯爵夫人とは異なり、貴族ではない女性には稀なことではあるが、ロビンソンは、当時のファッションアイコンとして名声を馳せるようになったのだ。ロビンソンは、女優や皇太子の愛人といった社交界での成り上がり者であり、このような社会的地位の低さも彼女のファッション戦略と密接に関連していると解釈できる。このようにロビンソンは自らの個性を生かしたファッションという消費文化を強みに社会的名声を得るが、ファッションは彼女の文学作品でどのように表象されているのだろうか。

IV 異性装と『ウォルシンガム』における財産継承

『ウォルシンガム』(1797)におけるファッション表象には女性が男装をする異性装が挙げられる。そして、意外なことにこの作品において、異性装は財産継承制度と密接な関連性がある。

ロビンソンはどのように異性装という行為を思い付いたのだろうか。まず、ロビンソン自身女優であったことから異性装の役柄の存在を熟知していたことが考えられる。1779年にはベンジャミン・ホード

4 ファッション・プレートとは、雑誌などに掲載されたファッションの紹介ページのことを指し、素材やデザイン、色、特徴などの詳しい説明が別頁に記載されている。ファッション・プレートは、その始まりを18世紀まで遡ることができ、版面に手彩色の時代は経費もかかったので、挿入される枚数も多くはなく、そして情報はファッションの中心地パリ発信が重んじられた。(岩田託子「十九世紀女性の流行意識—ファッション・プレートと小説に見る」久守和子・窪田憲子編著『<衣装>で読むイギリス小説—装いの変容』ミネルヴァ書房、2004年、24-43)

5 Byrne 193.

リーの『疑い深い夫』におけるジャシント役でロビンソンは初めて男役を演じ、異性装という行為が彼女にとってはなじみのあるものであり、実際彼女の男装は好評を博したようだ。⁶ また、ブロードビュー版の『ウォルシンガム』を編集したジュリー・シェイファーは、そのイントロダクションで、18世紀に異性装をする女性は、今よりもよい生活を送るためといった経済的な理由からや、ハンナ・スネルのように恋人の後を追うため、あるいは、自らの愛国心に駆られて軍隊に入ることが多かったようだと言っている。さらに、エリザベス・インチボールドの『ある単純な話』(1791)やマライア・エッジワースの『ペリンダ』(1801)に出てくるような仮面舞踏会も女性が異性装を楽しむ機会であったと指摘している。⁷ 加えて、シャロン・セッツァーは『ウォルシンガム』に登場する異性装の登場人物、サー・シドニーのモデルが18世紀フランスに実在した外交官兼スパイのシュバリエ・デオンだったのではないかと推測している。セッツァーによると、1790年代、デオンが財政困難に陥った時、生活費を稼ぐために、ボックスホール、バースやブライントンなどで彼が得意としていたフェンシングの腕前を男性相手に女装姿で観客に披露していたようだ。そして、その観客の中にロビンソンも混ざっていた可能性を示唆している。⁸ ロビンソン同様、デオンも当時のイギリスで名を馳せたセレブリティのひとりで、彼らの噂や風刺画の流通が人々の興味の対象になっていたことは容易に想像できるであろう。

では、ロビンソンは『ウォルシンガム』でどのように異性装と財産継承を関連付けているのであろうか。この作品はウォルシンガム・エ

6 Byrne 78-9. バーンはメアリの男装役の人気は彼女の人生が性的な話題と切り離して語れなくなる契機となったと指摘している。なぜなら、男が公の場所で女性の脚を垣間見る唯一の機会だったからである (79)。

7 Robinson, Mary. *Walsingham; or, The Pupil of Nature*. Ed. Julie A. Shaffer. Ontario: Broadview Press, 2003. 16

8 Setzer, Sharon. "The Dying Game: Crossdressing in Mary Robinson's *Walsingham*." *Nineteenth-Century in Contexts* 22 (2000): 305-6.

インズフォースと彼の文通相手のロザンナ間に取り交わされた四通の手紙からなる書簡体形式で始まり、物語の残りはウォルシンガムの一人称の語りで展開する。

ウォルシンガムは、ウェールズで生まれ、父親アーサーは貧しい牧師補、母親ペネロピは古くから続く家系の出身であった。ペネロピの妹フランシスは、グレノーウェンに広大な地所を持つサー・エドワード・オーブリーと結婚し、この結婚により、レイディ・オーブリーとなる。サー・エドワードには、母親の反対を押し切って軍人になった弟、オーブリー大佐がいた。

ウォルシンガムは、オーブリー夫妻に息子サー・シドニーが生まれるまで、夫妻の愛情を一身に受け、幸せな幼少期を過ごす。しかし、サー・シドニーの誕生により、夫妻の愛情が息子に移行すると、ウォルシンガムは不幸に追いやられる。時が経過し、外国での教育を終えたサー・シドニーが完璧な男性として、ウォルシンガムの前に姿を現す。ウォルシンガムが好意を寄せるイザベラは、彼よりも早くサー・シドニーに会い、その時の様子を次のように描写している。

Figure to yourself a form moulded by the Graces, and fashioned by a studious desire to please; a countenance rather interesting than regular … His [Sir Sidney's] manners are so fascinating, so polished, so animated! He sings divinely, and plays on many instruments with skill the most enchanting! … He repeated several passages from the Italian poets, and from Ossian; for he has been these last four years under the tuition of one of the most learned and enlightened men in Switzerland. Born to embellish society, Sir Sidney comes among us like a constellation; every scene assumes new powers of attraction; every object looks gay at his return! (『ウォルシンガム』 95)⁹

サー・シドニーを絶賛するイザベラの手紙を読んだウォルシンガムは苛立ち、手紙を投げ捨てるが、実際に自分がサー・シドニーに会ってみると、イザベラの描写通りの男性であることを認めることになる。

Sir Sidney Aubrey was exactly the being whom Isabella had described - handsome, polite, accomplished, engaging, and unaffected. He sung, he danced, he played on the mandolin, and spoke the Italian and French languages with the fluency of a native. Yet these were not his only acquirements; he fenced like a professor of the science; painted with the correctness of an artist; was expert at all manly exercises; a delightful poet; and a fascinating companion. (『ウォルシンガム』 95-6)

この二つの引用からは、サー・シドニーは女性から見ても、男性から見ても教養あふれる魅力的な人物であることがわかる。タイはサー・シドニーの持つ賞賛されているスキルは、伝統的に男性と女性に教えられているものの結合であると指摘している。¹⁰ また、プリューワは、ピカリング版のイントロダクションで、サー・シドニーのユニセックスな教育は彼（あるいは彼女）を男性社会と女性社会の間を自由に行き来できることを可能にしていると述べている。¹¹

そして、全 98 章の最終章でこの物語の最大の謎が明らかになる。サー・シドニーは男性ではなく、女性だったのだ。レイディ・オーブリーは、子どもの性別を偽っていた理由を次のように語る。

‘At the time of Sidney’s birth, my mind was agitated by hope and fear.

9 Robinson, Mary. *The Works of Mary Robinson: Walsingham; or The Pupil of Nature: A Domestic Story*. Ed. William D. Brewer. London: Pickering and Chatto, 2010

10 Ty, Eleanor. *Empowering the Feminism: The Narratives of Mary Robinson, Jane West, and Amelia Opie, 1796-1812*. Toronto: U of Toronto P, 1998. 48-49.

11 Brewer xviii.

The extraordinary will of Sir Edward held out a strong temptation to that avarice which has ever been a prominent feature of my mind. Mrs. Blagden availed herself to this despicable passion, and suggested the idea of concealing the sex of the infant Sidney. I acquiesced; from that fatal moment I was the slave of her dominion. We travelled from place to place on the Continent, ever alarmed, and perpetually in danger of discovery.’ (『ウォルシンガム』 478 下線筆者)

この作品は当時大流行したアン・ラドクリフを意識したゴシック小説の影響を受けていると言われているが、ラドクリフの作品における最大の謎は出生不明のヒロインの血統である。つまり、ヒロインの家系が物語の最後に明らかになり幕を閉じる。一方、『ウォルシンガム』における最大の謎とは、異性装により偽らせたヒロインのジェンダーであり、ジェンダーの違いにより、受け取るべき財産に差異が生じることに作者の意図が込められている。家系図と財産継承は相互的な装置として機能するが、ラドクリフの作品と『ウォルシンガム』においては、異なる結末を導いている。ひょっとすると、ここでもロビンソンはファッション同様、流行のゴシック小説のモチーフを巧みに使いながら、自己流のひねりを加えたのかもしれない。

『ウォルシンガム』における財産継承の詳細は、サー・エドワードの遺書に記されている。彼が遺書を作成したのは、妻が妊娠中であつたので、生まれてくる子どもが男子であるか女子であるかによって以下の違いを明記している。

In case of its being a son, the extensive and rich domains of Glenowen, together with the manor-house, plate, furniture, pictures and library; and the sum of sixty thousand pounds, to be paid when the said heir male should arrive at the age of twenty-one; with the farther sum of six

thousand pounds per annum for the expences of the board, education, and travels of the said heir from the age of twelve to seventeen. ….

In case the offspring of Lady Aubrey should be a female, the estate of Glenowen and all the appurtenances thereunto belonging, devolving on Sir Edward's brother Colonel Aubrey, he bequeathed the sum of thirty thousand pounds to the said daughter, to be paid on her attaining her eighteenth year, with three hundred pounds annually for board and education …. The reminder, deducting Lady Aubrey's marriage-settlement of twelve hundred pounds *per annum*, to go with the estate to Colonel Aubrey and his heirs for ever.

(『ウォルシンガム』 476-7 下線筆者)

『ウォルシンガム』におけるこのことこまかな財産継承は、18世紀末に出版されて以来20世紀までイギリス法の考え方に強い影響力を持ったウィリアム・ブラックストンの4巻からなる『イギリス法解釈』の中で相続における準則 (canons of inheritance) に則っていることがわかる。

I. The first rule is, that inheritances shall lineally descend to the issue of the person who last died actually seised, in infinitum; but shall never lineally ascend.

II. A SECOND general rule or canon is, that the male issue shall be admitted before the female.

III. A THIRD rule, or canon of descent, is this; that where there are two or more males in equal degree, the eldest only shall inherit ….

IV. A FOURTH rule, or canon of descents, is this; that the lineal descendants, in infinitum, of any person deceased shall represent their ancestor ….

V. A FIFTH rule is, that on failure of lineal descendants, or issue, of the person last seised, the inheritance shall descend to his collateral relations, being of the blood of the first purchaser; subject to the three preceding rules.

VI. A SIXTH rule or canon therefore is, that the collateral heir of the person last seised must be his next collateral kinsman, of the whole blood.

VII. The seventh and last rule or canon is, that in collateral inheritances the male stocks shall be preferred to the female … — unless where the lands have, in fact, descended from a female.

(『イギリス法解釈』2巻208-40 下線筆者)¹²

ブラックストンの相続における準則は、血統卑属による長子限定相続、つまり長男が優先的に相続権をもつということを定めている。当時の法的な観点にサー・エドワードの遺書を照らし合わせると、彼の子どもが息子であれば、彼の資産はすべて第一親等の男子である息子に相続されることになるが、もし、娘が生まれた場合には、男子の傍系親族である弟、オーブリー大佐に継承されることになってしまうのだ。サー・シドニーが本来の性別の通り女子である場合には、三万ポンドの遺贈があるものの、その相続内容は、男子であった場合のそれとは雲泥の差であることは遺言状から歴然としており、それに加えて、サー・シドニーが息子であるか娘であるかで大きく左右されるのは、支払われるべき教育費であることも明白である。また、子どもが男子であるか女子であるかによって、甥のウォルシンガムや女中頭のブラグデン夫人にまで受け取る金額の違いが生じる。レイディ・オーブリーに「尋常ならざる遺言状」(“The extraordinary will”)と言わしめた内

12 Blackstone, William. *Commentaries on the Laws of England. In Four Volume*. New York: Garland Publishing, 1978.

容が、サー・シドニーを「男子」として育てようとレイディ・オーブリーに決意させたのだ。

V 「女性のための大学」の設立

このように跡取りの子どもが息子であるか娘であるかによって受け取る財産に差異が生じることは明白だが、ロビンソンは男女によって受け取るべき教育費を厳密に記していることからこの差異に殊に着目していたのかもしれない。というのも、『ウォルシンガム』が出版された2年後の1799年に発表された彼女のフェミニストとしての主張が込められた作品である『イギリスの女性たちへの手紙—精神的不服従に対する不当な措置について』（以下『イギリス女性たちへの手紙』）には以下のような主張が含まれているからだ。

CUSTOM, from the earliest periods of antiquity, had endeavoured to place the female mind in the subordinate ranks of intellectual sociability …
Let WOMAN once assert her proper sphere, unshackled by prejudice, and unsophisticated by vanity …

（『イギリスの女性たちへの手紙』131 下線筆者）¹³

これは、『イギリスの女性たちへの手紙』の冒頭部分で「大昔より、知的な場において、女性の精神を従属的な地位に据えようという風習がある」と、女性の知的活動が男性のそれと比較して劣っていることに疑問を呈しており、「偏見」（“prejudice”）や「虚栄心」（“vanity”）

13 Robinson, Mary. *The Works of Mary Robinson: The Lucky Escape, Impartial Reflections on the Present Situation of the Queen of France, Nobody, a Comedy in Two Acts, The Sicilian Lover, A Letter to the Women of England, 'The Sylphid Essays', 'Present State of the Manners, Society, &c. &c. of the Metropolis of England', 'Memoirs and Anecdotes of Eminent Persons', 'Biographical Sketches', 'Jasper'*. Eds. William D. Brewer and Sharon M. Setzer. London: Pickering and Chatto, 2010.

によって判断されない「適切な領域」(“her proper sphere”)に女性を位置付けることを主張している。さらに、ロビンソンは次の引用のように、もし自分に財産があれば「女性のための大学」(“UNIVERSITY FOR WOMEN”)を設立したいと唱えている。

Had fortune enabled me, I would build an UNIVERSITY FOR WOMEN; where they should be politely, and at the same time classically educated; the depth of their studies, should be proportioned to their mental powers … In half a century there would be a sufficient number of learned women to fill all the departments of the university, and those who excelled in an eminent degree should receive honorary medals, which they should wear as an ORDER OF LITERARY MERIT.

O! my enlightened country-women! read, and profit, by the admonition of Reason. Shake off the trifling, glittering shackles, which debase you.

O! my unenlightened country-women! read, and profit, by the admonition of Reason. … Let your daughters be liberally, classically, philosophically and usefully educated; let them speak and write their opinions freely; let them read and think like rational creatures; adapt their studies to their strength of intellect; expand their minds; and purify their hearts, by teaching them to feel their mental equality with their imperious rulers. (『イギリス女性のたちへの手紙』159 下線筆者)

その大学で、女性たちはきちんと古典的な教育を受け、その勉学が彼女たちの精神力に比例されるべきであり、半世紀のうちにはすべての学部を教養ある多くの女性が占め、その中でも特に成績が秀でたものには「文学メリット勲章」(“ORDER OF LITERARY MERIT”)が与えられると述べている。そして「啓蒙されていない女性よ! 理性の忠告に従い、読んで、学びなさい」と、女性が学ぶことについて声高に説

いている。

このロビンソンの『イギリスの女性たちへの手紙』における「女性のための大学」という彼女が考える理想の女子教育の言説は、『ウォルシンガム』におけるサー・シドニーの教育と呼応していると考えことはできないだろうか。実際は女性であるサー・シドニーは、息子として育てられたため、当時の男性が身に着ける最高の教育や学問を修めている。つまり、サー・シドニーの存在は『イギリスの女性たちへの手紙』でロビンソンが主張している18世紀の女性の知的活動の限界を超越した理想の女性の具現化としても解釈可能かもしれない。

VI おわりに

ロビンソンは、美貌とファッションセンスを武器に、また、当時の消費文化を味方につけ、社会的に低い身分をものともせず、社交界で注目されるセレブリティとしての地位を確固としてきた。しかし、人生はいつも順風満帆という訳ではなかった。贅沢な暮らしぶりのため借金がかさみ、皇太子の愛もすぐに醒め、皇太子の手紙と引き換えに皇室から金をせしめたり、その後も様々な男性と関係を持ち、辛うじて経済的な体面を保つようになる。

しかし、1783年頃から生涯完治することのなかったリ्यूマチの兆候が表れ、体の一部が麻痺するなど、今まで最大の売り物としてきた肉体に変化が見え始めた。88年からは『ワールド』、『オラクル』といった雑誌に詩の投稿を開始するなど、文筆家としての活動が活発になり始める。これは、華々しい社交界で忘却されつつあったロビンソンの知的な場で自己を再構築しようという方向転換の現れだったのではないだろうか。バーン同様ロビンソンの伝記を執筆したダヴェンポートも、『詩集』が出版された1791年を扱った「イギリスのサフオー」という章において、ロビンソン夫人は、真剣な文筆家としての自分自身のイメージを作り替えようとしたが、バーディタとしてのかつての

自分のイメージを取り除くことに苦勞したようだ指摘している。¹⁴

『ウォルシンガム』では、かつては自分が流行を作りだしたファッションを、今度は異性装というかたちで自らの作品に落とし込み、教養に満ちた「女性」に財産継承をさせようという大胆な行為を描いている。彼女が『ウォルシンガム』で用いた異性装というある種のファッション戦略からは、女性の権利の主張、現行の男性中心的な制度への違和感が込められており、パーディタと呼ばれ社交界や消費市場でもてはやされたロビンソン像とは異なる、彼女のフェミニストとしての知的な側面で自分を印象付けようという気概が窺える。

(獨協医科大学 基本医学 語学・人文教育部門 助教)

14 Davenport, Hester. *The Prince's Mistress: A Life of Mary Robinson*. Gloucestershire: Sutton Publishing, 2004. 163-4.